重修真書太閤記

五編 四

459
44

特13
門 ヤ5
號 459
養 41

消 福藤

重修眞書太閤記五編巻之十

羽柴秀吉大敵を破る事
并宇喜多和泉守敗軍の事

山中鹿助幸盛立原源太兵衛尉十分乃勝利を得く勇ミく悦び上月ゑ歸り委細姫路へ注進せゝば秀吉其忠戰を感じ扶ゑの後別使をもつて山中立原をゝ勝久ゑも諸勢を引具し罷歸るへしとや遣けるふすり尼子勢本意なきことにそありくども筑前守所存あるや越いることを故上月を捨く姫路ゑ至り其子細を尋ぬれば秀吉いふ樣上月城ハ宇喜田を釣餌ゆ

同文會印

御邊等真壁を遮く宇喜田の改名く籠納め
玉薬兵粮と所得をふ彼城殘
捨置ハ直家ハ又〻兵士を籠粮と矢玉を
納置〻ら今度の大勢ゆ〻能武士を
多く入置此方より城を攻る時直家そ〻やる後詰
〻城方と挾うちんと謀るゆふべ〻如是の秀吉ら
直家を釣そうとて彼り去ふ因く面〻を呼返を
彼りゆ〻委細ふ程〻を釋ひけ〻ハ山中立原感心て
筑前守の剛勇を賞美〻暫く容子を伺ふ真壁ら
殘兵共遁走歸り次郎四郎討死を〻由注進〻けれバ
直家大ゆ驚き去べ上月へ馳向ゆ〻戰を決せんと

ゆづ所侯を遣そ〻けるふ敵既よ引揚て空城なりと
告〻かハ直家さ〻ば人數を籠置べ〻誰ら是ら將そんを
其器を撰ぞれけるふ上月十郎景利元ハ上月の住人
彼りけるか某彼城を守ゆ〻べ〻ゆく望む直家敵の
來るとそを我後詰とて出陣をる間ぐ〻ら〻られ
無益彼りと云ハ景利仰ゆ〻もいとゞ上方ハ弱敵ゆ
何程乃ところゆゆるそを何万騎ふて圍ゆとも方便を以て
打滅〻付慕ひよ東播州を平均〻ん〻と荒言
〻けゆゆ直家そ〻ゆ〻景利を以く上月の城主
と〻〻矢島五郎七を加勢ふ差添けるゆ〻十郎いよく
氣力を増都合その勢一千五百餘騎ふて楯籠を

敵あそしと待掛たり羽柴筑前守これを聞て扨こそ我推量し如くなれ然ハ推寄攻立て直家を引出さばやとて即時に用意し當國の國人等を催促し都合二万餘乃勢にて姫路を打立上月にいたり城を十重廿重に取かこんで聲〻に上月の先城主ハ最初に攻付て打取たり其乃次に入替りし城主を我〻が旗の手を見るとその儘逃去その後の城主をバ押寄て直に首を取今また其方達當城に入りしかども我〻を敵としてハそや逃よかし見遁して呉んざるならバをなさし二ツなき命を失ハんとするか早〻城を渡して退去せよと呼ハりしかバ上月

矢島大に怒りて悪ひ上方武士乃雑言かな我を退そ一人も残らさ首打落して呉んずと上月矢島矢倉の上に立あらはれて詈りけれバ寄手の面〻上月矢島に向ひ早く城を渡せよと嘲りけり双方詞戦ひして日數を送りけるうちに羽柴が斥候走廻り直家既に後詰乃ため二万五千餘騎を引率して打立しよし告しかバ筑前守かねておもひし処なり去ハ手分をなすべしとてまづ小寺孝高を當國乃案内者なればとて二千餘騎を差添高月城より三拾丁を進めて直家が寄來るべき路傍の林の中に埋伏し置是ハ直家が敗軍して引返さん時

かゝ〻に旗をたてゝ立てゝ敗走の士卒を集めん為
休息をなし〻拔の時急に打立てゝ散〻に駐立べと
定めゝり次に尼子勝久山中幸盛立原源太兵衛尉ハ
一万三千餘騎を率し熊見川の向に埋伏させ直家ら
勢大かゝ川を渡らん時打出てゝ無二無三に駐破るべ
直家ら勢敗北を共それをハ少し〻も追べゝ〻直ち
上月乃城に向ひるべしと約束し次に別所孫右衛門尉を
呼てゝ御邊の勢に當國の國人等を差加へ五千餘人をそ
熊見川の向乃川下に居るべし偖直家尼子
勢に切立られ敗走をば先陣乃勢の川を渡りの
驚きあゝてゝ引返すべし〻その時直家岸に登らんと

する處を見すまし一度に起り立て鐵炮を打掛急いで
駐向ひるべし然らば直家備を立ひまなく散々にあらそ
逃走るべし其頃其ら〻に追打に成ん〻と示し
合を次に蜂須賀彦右衛門尉同小六神子田半右衛門尉
中村孫平次堀尾茂助脇坂甚内加藤孫六同作内此八人に
六千餘人を附て熊見川の此方乃岸に三手に二組
に〻〻大將四人に引分れ備を立て伏たりける其後
筑前守諸大將達にもけの八直家に云に及ばず備前勢
いづれも雲終に味方なれ多く傷ることなかれまて
いそんや討捕を手柄とすることなかれたゞ肝を
つぶさせよとや含めたり其旨各心得て持場へ

出立しめべ筑前守加藤虎之助福島市松片桐藤井以下
腹心乃遅兵五千餘人を引率し一面こそ上月の城ゑ向ひ
直家が後詰の勢出來るを〻ハ態と恐怖く散〻ゝ
敗走し川を打ら〻し高倉山乃麓をさて退くへ
然してのち合圖を聞ハ速ゑ引返しゆへと殘る処形く
下知をなし敵の寄る迄待掛らゝ和泉守直家も
かくぞゝり羽柴ゝ手配整ひしとハ夢ゑも知ら先敗の
恥辱を雪ぐんと心よふく憤る二萬五千乃大軍を
率し上月表へ馳來る所侯を出してあれを見さし
むるゑ羽柴ゝ勢五千餘騎ゑく城を取圍ミ合戰
最中あるまと告けれバ直家からくと打笑ひさゝゝの

勢ゑく城を圍く戰ふ処へ此大軍ゑく押寄るバ
盤石を以く累卵を推如くなるべし抑の上兩度まで
當城を責し時某いゝも後詰きばしハ今度も
定めく後詰あふべらばと油斷しく居るなるん
よし後詰ありとも二三千ゑ過ぐと思ふるべし
抑手ゑ此大軍ゑく押掛らんすハさらそ仰天する
ゆらめさ〻バ手配をなるべしとて二萬五千餘人を
二手ゑむもぐと引ら分揉る揉ぐ押寄る秀吉かと
見ゆよりも味方勢を二ゆるら分一千五百餘ゑく
城をかこミ三千五百を一面ゑ立並べ直家を待ゝ
戰ふ屋〻と備ゑゝり直家近くと寄來り鉄炮を

二ツ三ツ乗あつや否面もふらに切こむる羽柴ら勢
敵の雲霞乃如く寄来るよ驚きたる風情にて
崩立ハ城と責ツふり返も總崩れ崩みて
散亂をこそ見こく秀吉大よ怒りきたるき者共ぞ
振舞かる中國勢とそ定めて取合ぬふり左様よ
裏崩みてハ此をる何ぞ返してぬ
下知をれども亂れ立たるる勢乃曲ぬれハ耳も更ム
聞いれぞ敗走をしめば和泉守直家左もなのるべき
事よとうち笑ひ爰を揉よ遁をる兵どもと真先よ
立こく追かけるハ羽柴ら五千餘人弓鉄炮を打ち
這ふ乃体よて熊見川を打渡る跡を見ぜこく

逃こうしかハ直家勝ふ乗こく息をも繼ぎて追打
同じく川をうち渡さんとをし時宇喜多が郎等
長船紀伊守岡越前守花房志摩守三人ひとしく
直家を諫こくけるハ筑前ぞ勢ハ多れども小勢をハ
あるべこくぞ拙乃上よ當國の者とくハちとも見へ
やさぞ然ハ如何ある謀をや設川ら川を渡
ゑちんと然るべこくぞと異見しこれども直家更ら
聞入ぞ羽柴筑前守一分乃功をあらら故ら國人を
用ゑざるなる歟こなるハ少そこるの伏兵ありとも
何程のことらんこん此競ひよ追掛こく姫路の城おで
乗取べし進めこと下知しけれハ逸雄の備前勢も

川中へ乗入く真一文字ふ押渡る宇喜田ろ先陣向ふ岸ふ馳上れハ直家も川中まて進ぞりその時川の向なるころ川上ふ埋伏したる尼子勝久山中立原横道吉田をそ〳〵め究竟の兵一万三千餘人潮の涌ろ如く旋風の巻ふ似くむらくとつと起り立宇喜田ろ勢の川邊ふ扣えて中へ大浪の打寄る如くどつとおめいく鐵炮を打かけ竪横十文字ふ馳ちりけを宇喜多勢ハ勝軍を競ふれ〳〵時なれハあくふ伏兵の向るべしとハかけらもありこの事ハ以の外周章ハ山中立原いかもも聞えし勇士ハり進ぞ掛るも法ありて撃ハ剛く射ハ穿まけるろどふ

宇喜田勢備四度路ふ揉立られ四方へぞつと散亂直家ろ川中ふ後陣の騒動を見て急ふ先手を呼返しふ防かんとなりけるふ先手ハ羽柴筑前守が勢茂追行しろ秀吉おりふ圖ふ引請そハ返を少し下知ふ〳〵ける聲の下ふを福島加藤片桐等俄ふ取くく返し電光乃閃きとろふ勢ふ乗じく百千の雷乃落めふ如く面もふらぞ切て入引手馬手ふ薙立撃拂ふほのく鎗鎌の利鋒りて切ころふこの如くろり叩き立打立しけれハ宇喜田ろ先勢引を引ふまぞ返さるも返されぞ只一緒ふ居強てふ拔く居ろりけれ羽柴筑前守此体を見ろよを

塩合拵といふより早く鐵炮一發そなつとそめまく
左右へ伏うる六千餘人蜂の如くふ起り立雨霰乃
とぶら如く鐵炮をうちかけ矢を射いらね攻立ー
かバ宇喜田勢からうじて向の岸へ逃登り虎口を
逃れ〳〵心地して一息繼處へ別所孫左衛門尉重棟
當國の國人を引具し案内知うる五千餘人鐵炮
そびーく打かけ〳〵閧を作り威を示し静かと切て
かゝる宇喜田勢ハ既うに勞迷ーうへと云三方四方より
攻付られ進退谷まり折節寒さそびく手さぐへ
ありふるどハ太刀の柄も取さとなるがごとし長船岡
花房ぞうまそめより心たりて用心をこゝ踏止まく

支え戰ふ其隙に直家からき命を助まくよりく
三十餘丁落延今ぞ心安ーとて人馬の息を休め
かつハ敗軍乃味方を集めんとなるまるふ爰もとより
五騎十騎そを集りゐどたなく一方ぞりよなりしかゞる
二処三処手を負ぬれとも那まくことふ寒さとしのぎそ
奔走をーうへあれバまさ用よ立べくハ見へざりけり
何も一処に寄集り上月へや寄ん備前へや歸らんと
評定なーける時まうりや鐵炮の音一聲ひゞくそのま
小寺官兵衛孝高八百餘騎藤巴の旗を颯とさそもく
浮田勢のつられそそ休息ー居たりける処へおめき
叫んて攻かゝまけ乃直家も大ふ驚きそぞふ討る

あるをけるを近習の侍肩より引かけやうやうふして道れ
ありさまで備前勢の太刀刀物具をそでめ重代きめの
足乃踏処もなきまで捨こうしぬハ小寺ろ手ゑ者
ありひの外よ分捕して十分乃勝利を得さそ引返そ

宇喜多和泉守直家ハ享禄二年乙巳の歳ふ生れ
今年五十歳直家の父を興家と云興家の父を
能家能家の父左馬允久家その父ハ土佐守信徳
その父ハ右衛門大夫高家その父ハ三宅太郎高秀
をゐそち三宅児島備後三郎高徳の男ゑり

勝久上月籠城の事
并秀吉凱陣褒賞の事

宇喜田和泉守直家ハ薪を負く燎原を走る心地
して這〳〵道を本國へ引返しけるが出陣の時ハ二万
五千餘騎さ〳〵も勇ましくそゑぐ〳〵かりけるがそつふ
千餘騎ゐたゝぬ小勢ふく見そぐらしげふ又
見苦〳〵されども是戰の罪ふなくゝ勢の多少ふ
よりもゆ〳〵直家若き時より弓矢を取く備前
美作を切従へ猛威を播作備藝の間ふ振ひ〳〵かば
攻れハ取圍ハ破る軍乃道心よ熟き〳〵大將なるふ
そゞめて羽柴筑前守ふかくまでも謀られと徒事ふ
ハるゑへらゝびとゝふ秀吉ふ軍兵をあ〳〵らゆる手足を
使ゆよりも猶易〳〵斯人凡人ゐハはらじ一定天下ゑ

兩虎二龍の間

小安くたまくべ

作者 池田雲池寛

亂を切鎮め太平の化を致さんとする大將なる歟し我此人と雌雄を爭ふとも決して勝を得べからず然ばそもく此人に從さく織田家に降るべきか但只今毛利家の手をそなれなば其災急に起る歟し如何にしてこの枕を兩虎二龍の間に安くたのそべきと運を兩端にかけさぞ居さりける扨まさに上月十郎矢島五郎七郎直家加勢をなのく居けるふ羽柴のさめに宇喜田の二万五千餘騎散々打ちあさられ備前國へ引返さるべ賴む木蔭ふ雨のめる心地しく最心細く城を捨て落行んとそれば尾子れ一統透間も彩く取まきたり然ハ日増に氣聽れして今ハ勿く防戰の義勢も彩く轍の鮒の水を待おひ

なく〜けるの処へ筑前守總勢を一手にまとめ短兵急に攻かけるに鬨の聲を揚げるにその響山谷を揺にして夥しく聞えけり城中にハ今を叶そと城を開き降參を由を傘を出して請しめども後詰を賴に寄手を嘲哢し蓑笠させく上總躍さ勢んにあどいひ〜さとの惡げ身び城に火を放く地獄の猿共に焦熱おどりとさをんそとて無体に四方へ火を掛て燒立るにそ煙に火氣に犯されて城兵とも七轉八倒〜狂ひ死にに死にをりける是上月の地獄谷と後乃世迄も語に傳める縁く上月乃城落しめども筑前守爰ちもとる守るに

難き処なれバ破却し棄んと謂けるを山中鹿助進み出
我等一手にて守るべしと請けるに筑前守もさらく
思案し御邊の心にて守を課きそんとあるそれかゝば
隨分堅固に守りなへ焼亡をし処に夫くに修復し防禦
の手當も相當ふるをべしとありしかハ山中大に悦び
焼跡より止まり普請をいそげハ秀吉ハ姫路へ凱陳し
立原久綱を上月の守にさゝんとを議しけれどを
山中頻に此まあらく作州へ切入ハ雲州へハ路次
開けんとを庶幾る故に毛利の大敵を恐れを十月
下旬より正月中旬迄に普請成就し尼子勝久山中
幸盛立原久綱をそゝぐ上下二千三百人にて上月の城に

入羽柴筑前守ハ播州平均に打静め人質を取るを
國中の仕置全く行届き由を注進しけ往ば信長
とも外に感賞ありて五十日計に播磨一國を静謐を
大功成就のそゝめを云べし但一旦罷登るを彌播州を
給るべを御朱印を成下さるべき由仰遣をされしかハ
十二月廿三日播州姫路を立く安土へ參上し播州合戰の
次第を委細に言上をしかバ信長悦喜まし給當座の
褒美として不動國行の腰乃物あゝびに御前と云
葉茶壺を賜をりくれバ秀吉面目を施しけるを
厚く御禮申して扶の歳を安土に伺候し越年を
織田家譜に天正六年正月元日安土茶湯乃客

三位中將信忠羽柴筑前守秀吉二位法印夕菴
長岡兵部大輔藤孝林佐渡守長谷川丹後守丹羽
五郎左衛門尉長秀瀧川左近將監一益荒木攝津守
村重市橋九郎左衛門尉長谷川宗仁とあれば筑前守
正月まで逗留ありしと知るべし

重修眞書太閤記五編卷之十終

重修眞書太閤記五編卷之拾一

秀吉中國退治首途の事

并信長秀吉陣押見物の事

播州三木城主別所小三郎長治同小八郎治定等ハ
村上源氏具平親王の後裔赤松次郎入道圓心の孫
敦範ハ末葉なり敦範赤松の旗下ニて足利家ふ
暱近ー忠功を盡さ〳〵ハ足利の義詮將軍より播
州佐用の郡三木の郡の内を引分給ふ以
降武勇の名をおとさ〳〵數代相續し威勢國中ふ震
ひ人を知たる豪家なり然るふ長治若年なるふよ

ア叔父別所山城守賀棟万事を後見ス
別所小三郎長治ハ永禄元年戊午の誕生今年廿
一歳也長治の父大蔵少輔安治その父加賀守光
治その父俊治その父對馬守頼治その父太郎左
衛門尉則李その父加賀守則治播州東三郡の領
主と云則治の父を民部少輔宗秀その父敦範と
乃父敦光その父別所五郎入道範満入道圓光ハ
赤松太郎茂範の二男ふ〳〵て圓心入道乃弟也本
書ふ圓心の孫敦範と云ハ如何あるへき範満の
父を赤松太郎茂範と云其父ハ久範その父い家
範その父則景ハ〳〵めて佐用庄の地頭たりその

父頼則ハ村上天皇の皇子中務卿具平親王十代の
孫ふ〳〵
然ふ〳〵ふ賀棟先年ふ〳〵公方家へ忠を竭し信長へ懇
志を通し功勞もまさ度々ふ及ひ始終志を變をさ
ふふ〳〵信長ふも頼母さのふ思召とけるふ賀棟
毛利の吉川元春小早川隆景ふ語らひ忽ふ志と
變し思ひけるハ毛利元就既ふ逝去あり川ふ〳〵も
嫡孫輝元の武威西國を掩ひその叔父両川の智謀
無雙ふ〳〵て信義厚けれハ天下終ふ毛利の旗ふ麾
川〳〵然ハ信長ふ從ふ休ふ〳〵て織田家の侍大將
一人を討捕それを土産とハ〳〵て毛利家へ親〳〵屬

べしと思ひ定め賀棟使者を安土へ上せて西國平均ふ退治ふさ努らるべきよしを申ふ播州を退治あるべし播州退治のこゝ可然大將一人御差下しある度き由と具ふ述けるに信長ふも悦ちをみひ即羽柴筑前守秀吉を播州の守護として差向らるたく賀棟秀吉ふ對面して透を伺ひ是を討捕んと思ひけるふ秀吉の風操不凡ふとふく威勢あるうと拂ひて賀棟ふ企空しくふるを討漏しけるふ秀吉いかゝ佐用上月を打落し宇喜田直家を氣死さしめ播州一國平均ふ秀吉ふ從ひけるに賀棟よふも本意ふくおのひ如何ふもして是を討取を

やと思案しけるうちふ其年も暮ふ及ひ秀吉い安土へ趣ふ明るい天正六年二月の頃いまふ秀吉下向をは中國の容子を聞ハ宇喜田直家ふ注進ふ因て毛利家大ふ驚ふ両川を大將として大軍を播州へ差向らるへふ催あると云賀棟よふ時節ふとおのひけるい安土へ此節毛利三家とも九州へ向ひ合戰最中と承うひ早く御目代を下さるべし某案内者仕う中國へ切入やへゆと注進をしかふ信長ふゝひ羽柴筑前守秀吉ふ中國探題職を授けて山陽道へ下向をしむ秀吉微賤ふう起う今日山陽八ヶ國を管領をるを弓箭の面目ふうと大ふ悦

ひ三月四日首途ゐ〳〵けるゐ路次の行粧まことに遑と拂ておびたゝ〳〵

織田家譜ゐ四月毛利輝元の軍勢播州ゐ打入上月を圍こけるゐ五月信長播州へ下向あるへき催あゝ〳〵かとも果されを六月秀吉入洛信長ゐ相看し信忠を上将とゐ〳〵秀吉ことゐ副て播州へ下向と記を但殘太平記ゐ〳〵将軍義昭鞆津ゐまゝ〳〵ゐを因て四國九州ゐとゐ服〳〵奉うけとゝ三月秀吉を以て西國の先使とゝて播州へ下し義昭を押え〳〵むとあう

まり一番ゐ旗二番ゐ鉄炮三番ゐ弓四番ゐ長柄の

槍五番ゐ小具足計〳〵て太刀佩の士二行ゐ列を引其跡ゐ騎馬の侍其次ゐ太鼓其次ゐ螺其次ゐ鐘其次ゐ武者奉行其次ゐ當番の使番其次ゐ乘替の馬さまゝ〳〵の鞍置て幾匹とゐ〳〵ひうを其次ゐ羽柴筑前守小具足と記を〳〵長持幾棹と云数も知ゝ舁さゝ〳〵け其跡ゐ手明の徒の衆三行ゐ列を立其次ゐ五色の吹貫その次ゐ中巻の徒衆二行ゐ立その次ゐ瓢簞の馬印その跡ゐ大将筑前守緋威の鎧ゐ信長ゐ〳〵賜らゝし金裝の太刀を佩鍬形打て日輪の前立〳〵たゐ三枚甲をゝ近習ゐ是を持を奥州伊達の獻上せ〳〵村雨といふ七寸ゐあまれる駿足を此度拜領を

に打乗馬廻うまを加藤虎之助福島市松片桐助作堀尾茂助脇坂甚内蜂須賀等万夫不當の勇士と幾許といふ数もおわえに従へたり此等いむ〻〻頼光の四天王新田義貞の十六騎ふも勝アてそ見へたりけり其次ふ鉄炮鎗弓長柄の兵士打込よそ の数あまた續きたりそ の次ふい小旗その次ふ宿老浅野枚原其次よ非番の使番衆廿八人其次ふ斥候衆三十六人其次よ騎馬衆其次ふ徒衆其次よ押い竹中半兵衛尉重治前後の兵士一万二千五百餘人その行粧の厳重と言語よ絶たり信長ふも西國手遣の門出ふり御見立あるへ〻とて馬廻衆廿餘

人と召具〻あひ路次よ出御あ〻て行列を見物ふ〻ふ秀吉御前を過る時近々と馬を進め給ひ手に持たりし金の切裂紙の采幣を手自授けらるし〻ふ秀吉ふ〻と賜ふて馬上のまゝ前後をさし招きさて下馬〻て御禮申まゝ打乗て静々と馬を進め〻〻ふ信長おめてたありと賞歎まし〻ふまゝ大聲よ申〻〻くと笑ふをあふ松井友閑武井夕庵両法印御傍よあうけるふ向をらと筑前守ふ行列の厳重ふ〻〻聞〻まされう此威風と以く押行い唐天竺まて打従へんとも難ふら〻と仰らとけるとい両法印まとふ御諚の通うふひべ〻但何

故ゑ又御笑ひあるゝふやと言上しけるに信長い
やとゝ秀吉い氏もふさのものと聞それゝ我ゑ推參
して奉公の勞とおさゝ孫ゝめ足輕の小身より段
段よりゝ出て今中國の探題職ゝるゝと希代の侍と
いふべゝ然るふむうゝい猿面の小男ふとい誰も
名をよふのゝゝ猿よ小猿よといひゝゝ之其時を
その身をさゝ心得て返辭をゝのゝか今日もその
猿面いかゝゝ孫と誰かゝ猿とよふ人あゝんとお
のつゝ知と笑とのゝふゝたるゝと宣ひゝうゝ両
人承ゝう古今めりらゝ高運ののゝ乃外ふま
たあるべゝゝも存さゝ然ゝふうゝ何わと高運の

士ふてをその運を開くゝき明君よあてゝゝ木石
と共ゑ山壑の間ふ朽果い事そのためゝ少あうう
いい筑前守とて忠君ふ遇奉う川ゑいあそ加様ふ
出世いゝゝいふゑと尋常の主君ゑ仕へいてゝ何と
て如是幸福を得いゝんやと御取合やけゑハ信長
弥さげんよゝゝ安土へ帰城まゝくゝ扨同月七
日筑前守播州ゑ下著し粕屋う館を本陣とあい小
寺孝高とゝめ國中の諸將あとくく出仕して中
國探題職の賀儀をのべける後中國征伐の評議ふ
及ひけるふ別所小三郎長治の名代別所山城守賀
棟ゝうひふ家老三宅肥前守治忠両人を秀吉の側

ちらく招き西國征伐の事安土にても偏に面々と頼み思召さるゝ処也案内者といひ老功の古兵ふう定めて妙策もあるべゝことに評定の座ふう胸中と残されやさるべゝとありける時も秘て賀棟治忠や合点ゝとあるを以て賀棟急度目合ゝ忠心得進ゝ出て歴々御列座の席といひ中國御征伐大事の御評定とや旁口を箝て高論を伺奉るへき筈なれへ共ふまゝひに爰ふ召出され末席ふ連なれ上い斟酌ひへいりく無禮ふ當りてやや因て愚意の趣く処を言上仕るへきなれい抑毛利輝元朝臣今年廿五歳ふもとも吉川小早川両人の英雄補

佐ゝてゆへも山陰山陽両道の内大形その旗の手ふ麾き四國九州まても其威ふ從ふ時ふい格別の奇計を施さるゝれあるひも合戰その利あるまゝく其上ふ只今幕下の勢凡廿万騎ふも餘うひへし御勢い小勢ふゝて不知案内の客戰ふう備前備中の際ふも切所多く容易ふ大軍を押ゝゝひて んの然いまつ敵の端城一処攻取てい軍士を籠込次弟くふ進まとあゝく終ふも一國を取いふ至るべく存ひと詞巧ふ中國勢の猛勇を稱して秀吉ふ恐怖の志を生をゝめんことを謀ゝけるふ秀吉ふと聞て莞尓と打笑ひ毛利家ふく士を養ひその負

数万騎におよふ由かねてより思ひ設しこと又敵
の多勢をおそれなバ何とて四方に向て軍をハを
なさで勝敗ハしれざるを知御邉等ハ郷導を主と
し是より備前へ打入んに赤穂より本田福浦を越
ゆくべきや又ハ山陽道を舟坂山を打なし三石八
木山にや打出ん高山峠を越て天神山にかゝるべ
きやその善悪を計らひあくへと申されしとのへて
三宅おし返し兵法に彼を知己を知ときハ百度戦
百度勝といへり
孫子謀攻篇に彼を知己を知ハ百たひ戦て殆からず
し彼を知をしても己を知ハ一勝一負彼を知を

己を知されハ毎戦必敗といへるを引しこと
吉川の勇小早川の智ハまことに唐士の張良樊噲に
も比すべしそれ等を敵になして不智案内の境に
向ひ軍をなしなバむくんと能々御勘辨ありて然るべ
く奉存と利口にまかせて言廻しけれハ秀吉も心中
に危懼の心を生ずべきなりと推量をしに筑前守
をこしも恐れを危ぶまバや肥前守御邉が左様
にいふなりし理至極にあのそるれどもそれハ兵
法の上の事に秀吉ハ日吉といひし稚童のむかし
小童を集て榎の樹の下に陣を取終日軍の掛引し
て心に覚へし軍法を以て諸國の合戦に試ひ何時

も勝利を得さうしゝ是い筑前ゟ心ゟ得て心ゟ傳へゝ處ゟれともかの韓信や張良とも多く負しと
あるふこいくんや毛利の両川如き何わとの事ゟ
あらんさのこ恐るゝことかゝ左様のことを心配をび
たゝ路次の便不便を勘辨していつまゝも敵の強
りゝん方へ案内をべゝと事もあけふのひけをゝ
三宅も別所もあさとゝて両人ともゟ聊不平の顔
色ゟて各退散ゟゝ

別所小三郎長治信長ゟ謀叛の事
并後藤基國異見の事

別所山城守賀棟三宅肥前守治忠両人筑前守の本

陣ゟ三木の城ゟ帰う大将小三郎長治同小八郎
治定その外老臣諸士を集め山城守の云様今日筑
前守軍評定の座へ国人を招集そる由先達而ヤ觸
送うけるゟ因て據ゟく我等肥前守と共ゟその座
ゟ連ゟゝ処秀吉か振舞緩急至極ゟて我々を
家人郎等と同ゝ様ゟ會釋をう事新ゝさヤ條ゟを
とも我等い村上天皇の御裔赤松の一族當國ゟて
を累代三郡の領主ゟう信長々斯波武衛の被管ゟ
ゝて将軍幕下ゟ席ゟゝ秀吉氏ゟかけをゝ種姓を知
そいやゝさ民の家ゟ生長し信長の足軽ゟうゝか
段々ゟ歴上うて當國を自由ゟ進退ゝ国人等う追

從とるふまうを次弟ゑ増上慢氣して左様ゑ失禮
とると言語同斷あるうその上ゑ自身の力をたろう
に毛利家と戰を挑ミ中國を爭ちんと企つるとた
とへゝ猫の額の者と鼠ゝ伺ふゑ異ゑらゝ富士の
山と丈くらゝべとゑはぬとゝ云べゝ當家筑前守ゑ
與力ゝて中國發向の鄉導をゝ忽ゑ毛利家ゑう討
手をさゝ向ひひゑん万々一信長ゝ本意の如く中
國を切取ることを得ハかの猿面の筑前いゑゝ勢を得
て我々を奴僕一列ゑゑゝいちんと競ひゑくゝ先
んとる時ゝ人を制ゝ後るゝ時ゝ人ゑ制をとらる卑
く織田家合体の思を變ゝ毛利一味の約を堅くゝ

ゑふくゝ存とるいうゝどやけまい長治治定若
年ゑて思慮淺くとゝく賀棟をゑひ肥前守次弟ゑ
うその餘ハ賀棟治忠の顔とのゝ守うけるのの乃
ゝ多けまい籠城ゝて毛利一味の旗を擧べきに評
定一決ゑゝたとけるゑ長治の弟小八郎治定生年
十七歳勇氣人ゑ勝まゝ若物ゑまい進ゝのゝて兵
ゝ神速を貴ふ今夜秀吉の本陣ゑおゝ寄帶ひろと
けく休息をゝ処へ亂入ゝたらんみゝ秀吉ゝ首を
取得んと掌の内ゑあるへゝ同心ゝゑへ方々と勇
ゝ進んて眞先ゑ立ハ同ゝ頃ゑる若のとも小具
足取て肩ゑのけ粕屋の館の秀吉の本陣さゝて馳

出とを山城守賀棟と肥前守治忠とこゝろよしを止め楚忽に少年ども仕損じあらば災直に來るべし静に事を計う毛利家の加勢を定めて然しての上籠城し不知案内の秀吉を當処へ引付是を討へしと云よう治定頻にあをとも為方なく齒を切て止うけ賀棟使者を安土へ奉う三木城内破損して堀溝埋もう修理を加えやさいらも毛利乱入の勢を防く便をあしらと誠しやめみ詐へしめら信長さらしめし子細なく許さはけう賀棟よりひ速に諸城の修理を加へ又毛利へも使者を遣しその後麾下の城々も相応に修復し志賀多の城

とゝ櫛橋左京進神吉の城とゝ神吉民部少輔淡川の城とハ淡川彈正高砂の城とい梶原平三兵衛野口乃城とゝ長井四郎左衛門尉端谷の城とゝ衣笠豊前守との〳〵居城を丈夫に持ゝこへヤべし中村高橋服部後藤長谷川神澤大村三枝上原魚住加古來野飯尾藤田等ハ三木の本城に籠るべし定め都合七千五百餘騎兵粮矢玉澤山に用意したりける時に後藤將監基國一人此企とふゝに以て然るべうしに信長ハ當時右大臣の大將にまし〳〵ゆゑ川勅定と奉して四方を征伐と何人かこゝを叛くへき羽柴筑前むし〳〵いともあれ今時弓箭の巧者ふ

らふ者ゐ〳〵播州一國凡五十日そうに切平け宇喜田和泉守を追討したる計策尋常の者の及ふ処よあ〳〵し毛利ハ勢盛ゐとも輝元年若くして士と愛とる道ようとく且順逆の理とをらに大儀の調畧叶ふべう〳〵只今秀吉を敵として當城よ籠ゐとゐんよ三十日を保りへけんや殿いまと若くおそ〳〵まとを左様よ思召ゐる老功の物頭衆是を異見ゐ〳〵ゐふへさ筈ゐいとやそとゐ籠城の用意を急うとゐふと當家の滅亡を招くとやへ〳〵と諫めけとハ山城守大ゐ怒う籠城の評定一決を〳〵処左様の言葉を出し諸人の心を迷さんとそること奇怪至極と云へ〳〵と訇ゐい基國進ゑ出て某別所の家よ忠節を盡さんとあのふう故よ所存を殘さに中を〳〵処諸人の心を迷さんとの御意近頃以て難儀よいい兎角信長と御手切然ゐへうに毛利十州を領しいと中をともそれさへいまゑ平均仕らに宇喜田直家秀吉よ破らゑ佐用上月両城を失ひいへとも毛利ようの手よそ守ういゐふあ〳〵そや信長い朝廷の三公ゐとその領國尾張伊勢美濃近江越前いつゑも大國ゐるへ兵馬豊饒よ聞えいとゑよ又若狭山城丹波丹後大和河内和泉攝津半國播州半國そへて十

四ヶ國の勢を發して順風に高さに登りて呼ぶ如く羽柴筑前守の軍立ち天授の英才ふかきを去年始て下向の時ふいまゝも謀手段もゆべし今既に播州を討平け信長の名代として中國探題職に補さらるとや何とても是に勝へき方便あんずけて籠城の企を止う給へうと理を盡して諫めけう

重修真書太閤記五編巻之十一

重修真書太閤記五編巻之十二

後藤基國愛子を孝高に預る事

并粕谷兄弟別情の事

後藤将監基國い真實忠誠を以て別所家興廢の利害を説籠城の企思ひ止まるべしと諫めしが色別所山城守を始め家老三宅肥前守ら此謀一朝一夕のことにあらず基國ら異見を用ひず仁義禮讓い太平の法臨機應變い戰國の式ふう我等い將軍家暱近の名家信長いその家陪臣にして我等ら等隷にあらず然も信長主の主たる將軍義昭を追却

けて惡逆既に天下に聞えぬ別その郎等の羽柴藤吉郎は筑前守にとなりて誰うちたるとも従ふべき當國にても小寺粕谷如き輕薄のの追従そるをやうとふとのまこと武勇よう人の用ゆることと我慢の角をふりたてて振舞いとて誰ら真の侍かはもとに従ふべけんや既に秀吉を討取て毛利家に合体し信長を打亡さんと決定しのまい無益に言葉を費をとそのを詮ふうるへ〜籠城して戰その利を得そい打死して名を後世に止めんのとと一度い怒う一度い憤う狂ひまはりて詞るふより基國もかさ祢て諫めんとぞふく左様に思切ふ上

も多年の馴染ふう何とて見をて奉るべる基國老年に及ひひへとも真先を拱て筑前守と合戰し快く討死をとひひへさくとて評定の座を立我家に帰う別處の家運傾きて滅亡遠らひ但某老年まて一子のおきとを愁ひひるに偶男子を得て今年八歳ふう才智そくまと器量まる殊勝ふまい我家督と相續し先祖の名をも此子の時に擧さとやと樂ミ寵愛ふしひるに山城守う一朝の怒ようその身を忘まと長治を勧めて信長に叛き籠城して筑前守を討捕毛利家に従ふて運を開うんと企てひるとハ石を懐いて淵に入と同しく千に一つも勝をあ

あるへうゝに老朽たる我身ハ戰場の土とあるとも生先遠き此子をとゝもに黄泉の途に同道さんとよりも情ふかるべし我元來別所と主從の義を結ひしに引あらぬ筑前守と一緒に家とも身とも全くふしたらんを誰うらあゝと云人のあるへき只寄騎といふ迫のとゝこい一度ハ異見を加へその義の趣く處を述しかとも聞入さるとい去よ如し我手の者共を引分て粕谷へ行ちやとおのひとてに即等ともを催ふさんとあゝかとも又思ひ返し我既に齢ゆゝふる後榮幾許もあらし然ふみ父祖の代より寄騎寄親とたのゝたのまれて

多くの年をゆき移し好もまゝ淺うしてその寄親の只今滅亡さんを助くる力あゝとて我身一人退たゝ臆病未練の者と後指さゝまんと口惜ゆふへよ〳〵我身ハ是より三木へ籠城し寄騎寄親の因を全くし子息とも年來入魂を明友の交厚き小寺官兵衛尉孝高に頼まんとおのひ定め夜ふまぎれて小寺ゝ宿所へ八歳ゝある男子甚太郎といへると落しやゝ存そる旨のゆへゝ此少年如何ゆもして人とあゝ給とるべし萬一弓箭の道に疎くハ僧ゆもふして一生を過さとゆふべゝとヤ送ゝ官兵衛尉よりも不審くおのへとも思慮

深き後藤ゝ事あゝ定めて故あるへしとおもひ子細あるべきを請取後藤ゝ郎等を返さとて弓箭取身の習あゝ加様ゝ親しく頼こたのもれし身の何しゝ敵とあゝ味方と引分ることあるしこも云ひたしたとひ去ることあるとも子息ゝ再度面會あるましきにくひとや送るしめゝ後藤将監ゝ聞涙をとゝらくゝと零して鳴呼官兵衛尉ハ年ごろけ事とも頼母鋪武士ゝかゝや我心中と察そしとおもへたゝ然らい幼稚のものゝためゝ善たをけを得とゝひゝ今いとやおもひ置ところとて家を焼ゝら郎等下部めしくして三木の城ゝを入持場を

請取固めけゝ

官兵衛尉孝高今年三十三歳長子長政九歳流布本十一歳とあるを誤るゝ

孝高後藤将監基國ゝ一子甚太郎を請取側近く呼ことあるを見るに八歳ゝハ丈高く骨太ゝ容貌も優ゝかゝしかとあゝ一所ゝ置て武士の藝をあらをかあるしかとあゝ一所ゝ置て武士の藝をあらをかゝ行末の一臂を得たゝとてそれゝハ朝暮おかし様ゝ養ひ立けるゝ弓箭を取ても尋常ゝこえ鑓長刀の術ゝ太刀打まで鞍馬の僧正坊ゝ従ひて奥儀を受しと語ゝ傳ふる判官義經のむしもか

くやと思へるに又文字かきあわせ文よみ習ひ六韜三略孫子呉子いはゝうあるとろ大旨を辨へある時ゝ馬をとゝとある時ハ水をらゝと山野をひけらゝとて鳥獸を捕ふとゝふゝけるふよう孝高も末代不思議の勇士とゝふるへゝと秘藏限とふゝあるのちゝ後藤又兵衛基次とのひゝかとゝ

流布本将監基國小寺ゝ家ゝ行て直ゝ幼子を詑しかつ山城守ゝ企と告ゝと記を誤ふゝ今書字山ゝ傳ふる基次ゝ記ゝよゝて改作し又粕谷右兵衛尉友政ハ羽柴筑前守と入魂ふゝけふゝ後藤ゝ三木へ籠城をゝと聞我とても別所被

管の身ふゝ主從の恩ハふけもとも年頃のよゝとおもへゝ昨今の筑前守よゝハ山城守とあを見付へけもとて同ゝ籠城ふゝたゝけも官兵衛尉孝高と友政とハまゝ毋方ゝ就て疎ゝらゝ間柄ふゝゝわとゝゝ孝高いゝあもゝて友政を援ひ出さえやとおのゝ様ゝふゝ送ゝゝとも友政義を重んゝて更ゝ承引をゝ然あゝけもハ孝高後藤ゝ許へ消息ゝて此頃の世の有様何とふゝ寂ゝゝくあゝへゝ武士の身ハ義ゝ依て命を輕るのふもとゝ今日ハ筵を共ゝて月花を詠めゝ際も翌日ハ楯を築ゝへて満月の弓ゝ櫻をゝの鏃を飛を親

くゝゐ粕谷の兵衛尉その城より籠うてゐ由たゝ
ふ承そう度く此方へ御出ゆへとや遣そゝゐひゐ
ゐとも弓箭の義と守うて返事たよいことそゝゐ
哀将監殿の才覺よて友政出城をゝめゐそゝ重畳
悦ひ入てゐゝ又友政出城ふくゐそゝ弟の助右
衛門尉そうを出されゐべゝ助右衛門尉とい友
政の養育ようて生長ゝ強ちふ別所の恩義と受
し身ふもいとぬそ只今ことへ出らゐゐとも誰う
をさゝゝやへさ能くふゝらへ給そうゐそゝ粕谷
か父祖何そうか悦ひ入ゐそん厚く取持給て
うゐへと懇ふ書送うける筆の跡孝高の直實義心

とうゝけゐとハ基國もそうふ哀とを催ふゝ涙
ゐ押へて粕谷ふ役所へ行あうの人を遠さけ小
寺ふ許よう斯ヤ越たう書中の趣浮さることにハあ
らゝ人の情のかくそうふ厚さを何とて空ゝくふ
ゝそてあふつさ但御邊ハ某と共よ此城の土とふ
うあふざさ覺悟ふうんよそ何とのふとも動さふ
ふまゝ因て孝高のヤ越とそふ從ふて助右衛門尉
そうと密よ小寺ふ許へ出ゝ遣あふへゝと勸め
ゝかそ友政も實理さふへたう彼と某とそ同母異
父の兄弟ふう父ふ喪よゝ時母年ふうけゐハとて
母の兄小寺藤兵衛尉の許へ呼取置けるか又志村

某の許へ嫁ぎて助右衛門尉をハ設けしゑ然る
ゑ助右衛門尉ハ六歳といふ歳志村も又早世さ
ゝ母ふゝひ寡とゝ女の手まて男子と育て
んと心許ゝ某とゝ同母の弟ゝ養ひて弓と射
馬とゝる道と習ゝとよと母の頼ゝこの黙止ゝ
さに某ゝ許ゝ任ゝるゝ粕谷と名乗こ
も粕谷の系ゝ志村の助右衛門尉ゝ實ハ
更に別所の由緒ゝ其難ゝ死そへき恩義も
ゝ我方ゝ任ゝ武士ゝ仕立ゝ弓馬とまふ
ゝとの頼ゝ亂の世の中ゝ也とも由
緒たつ様て身とハ立べゝ小寺か如斯ゝ

母か言ゝとぞゝその上助右衛門尉一人あう
とて此城さまて強ゝ助右衛門尉ゝと
て此城さらゝ弱ゝ然ハ有無ふつけて事の闕
さる男ゝ母の思ひをあめひやきハ某さにも遁
と川へゝ遁とよと心のうちふ祈ゝらんされと
も是ハ恩もあゝ義もまゝさそうふ重けきハ不孝
の罪と受ゝとも争てゝ城と遁と出ん此言譯ハ文
ゝてせめて知ゝるゝ時移ゝてハ人も知寸善尺魔
の世のゝひとやく小寺ゝ中に付て弟ゝゝと
出とへゝとて聽て助右衛門尉と呼出し小寺ゝか
くゝハ母御のいとゝゝと思ひゑへ親の子とあめ

ふ道ハかく有へき筈なれ其方いまゝ別所の恩を
請し身なもあるに兄弟さゝゝゝ戦死して父祖の後
を絶んと然るへくゝに早く當城を落て母ゝ孝養
ゝ盡をべしと諫めしかども助右衛門尉も兄と共ゝ
戦死をこゝろと覺悟して居さうしかとも將監ゝ
たしよう種々ふ道理を釋て出城を勧めしゝよう
涙とゝのゝ兄弟引分ゝ夜ゝまぎれて城を出小寺
か許へぞ行たりけり
糟谷右兵衛尉友政ハ民部少輔友貞の子友貞の
妻ハ小寺藤兵衛尉職隆の妹なり友貞永禄の初
ゝ卒しけゝい其妻兄の許へ帰り志村某の許へ

嫁し永禄三年庚申助右衛門尉を生同八年ゝゝ
寡となりしかゝ助右衛門尉を先夫の子友政ゝ
託をしと聞ゝ友政の先祖ハ大織冠の後裔閑院
右大臣冬嗣公の三男大藏大輔良方なり良方若
ゝゝ時相摸の國司ゝて在國し糟谷の里ゝ知
由して住けるゝゝの女ゝ相馴て男子一人を
儲けしゝ後ゝ糟谷太郎元方と云元方の子糟谷
庄司盛孝同次郎久季とて二人あり友政ハ久季
の後ゝ
別所孫右衛門尉重相陳謝の事
并羽柴秀吉三木の城へ寄ゝ事

糟谷助右衛門尉い兄の懇情ゑ因て三木の城と退去し小寺官兵衛尉孝高の許ゑ至り友政ゑ書翰を出しゐめゐ孝高對面し大ゑ悦ひ兄弟の心中察し入よゝと述ゐつ別所小三郎長治自滅を招くと笑止至極ゐゝ全く山城守賀棟の思慮淺く羽柴筑前守ゐ中國探題職とゐうて諸將を進退せるを嫉妬し暴ゑ筑前守を打亡してんと思ひ立しゐ是とも事の本末を知ぬ長治兄弟その外罪ゐき多くの士卒等ゑ大死させることの可愛ゑ實ゐ山城守ゐ企天理ゑ叶ひしことゐゝい孝高ゐとも一味合体せべきゐゝ右ゐも角ゐも賀棟ゐ偏執よゐ事の爰ゑ及ひしゐと雖ゐ誰うゐ是ゑ與力をん筑前守ゐ軍備柔をも茹てゐ剛をも吐ゐ攻ゑはうゐゐ降し圍いゐゐふらゐ勝その疾ゐとい風の如く徐ゐると林の如く侵掠ると火の如く動うさると山の如しとたとへべし如何ゐも近頃めゐらしき大將ゐうそれと取立て股肱の如く指揮ゐゐ信長い又ゐゑ勝ゑとゐとゐのふへし長松の下必清風ゐうといふゑあゐゐや其方ゐも筑前守ゑ從て隨分軍功を勵み實父の家名と起しゐへやうてヤ入べしゐゐ爰ゑて休息ゐしゐへとて一間處と補理ひ助右衛門尉と任とけうそゐ此糟谷右兵衛尉友政い鎌倉幕府

の御家人ゝて文治二年九月佐藤四郎兵衛尉忠信を打捕堀彌太郎景光を生捕し糟谷藤太有季の後紹ふゝ

糟谷次郎久季の子十郎兵衛尉家季その子關本大夫義忠その子庄司光綱その子筑後守盛久その子庄司久綱その子藤太有季ゝ

父ゝ民部少輔友貞と云爰ゝ別所長治旗下の諸士と集謀叛の色と顯ゝ國民驚ゝ東西ゝ奔走ゝ羽柴筑前守秀吉此体と見てか孫ゝ別所山城守三宅肥前守の容子心得ゝ急度此者ゝ謀叛ゝふべゝとて別所孫右衛門尉重相を呼寄長治謀叛のよゝ諸方よゝ注進あゝ其趣意何とぞや明白ゝ聞へゝと尋ゝ重相一向存ぜゝる由を陳しけゝ秀吉大ゝ怒ゝ其方ハ長治の叔父ゝ長治ゝ一族を催ふゝ其方何ゝて是を知ざるけんや然ゝ空ゝれゝて有のまゝ白に任ゝ彼等と云合ゝ某を覘ふのゝるべゝ有のまゝ白狀ゝ及ふへゝとゝやゝされゝゝゝ孫右衛門尉大ゝ恐ゝ全く某存知ふゝ所由をゝ披さひべゝ長治兄弟幼稚の間山城守と某と二人ゝて後見仕ひゝふ新公方の御教書ゝて御催促あゝ時某真先ゝ參上仕るへゝ由ゝて駐參ゝてゆひゝるゝ山城守快ゝゝ存ゝやゝものゝちハ某ゝ後見ゝ禁め山城守一人

て方事と執行ひ某は毎度岐阜安土へも伺公仕るれひしよ山城守
は一度も參上仕らず彼是よそ常々不快よふと以て次弟よ疎遠よ
打過ひ故何事よそも某へ聞ゆとあくい間今度も更よ知を
不ヤ為知いく一定故障ヤへきのと見定い無二の志まを御旗
下よ罷在ひと思てれい孫右衛門尉いたのゝさ者よそいくヤ
をい筑前守も尤あると點頭つき何様其方の誠心は我よく是と
知う長治い弱年あう深き所存あるべうび都て山城守う心よ
てとゝとあるへゝ但一且の禮儀あう長治へ書を送るゝ其
趣い今度中國退治の事長治案内者たるへき由を言上とゝん
ようて秀吉下向とう何の遺恨あうて籠城の結構よ及へるや
委細よ其始終をヤ上へゝ何様ゝも長治う意の如く御計ひ

あるへくいゆとのヤ狀也是よ孫右衛門尉私の書狀を添て送りけ
るよ返事よ及ひて推返しく三度よ及ひけるとい毛利輝元よ頼ま
れ一味合体の約とあるてひ尤最初よう御味方よ參くしも真
實の心よいひてひ因て當城よう引籠う御出馬を待て討死とん
この意よい此由秀吉へヤさるへゝとそヤけるふよう中國の
發向ととゝめ三月廿九日二万餘騎を率して秀吉三木の谷山
へ進發ひ但この谷山といふ処い前よい大河流ひて白浪つよふ
岸とあゝひ後よい高山峨々とゝて雲霧とゝへふ腰を遶
る堅利の勝地金城湯池天よ續き地を域る外いこの嶮岨を要
害とあゝ中ハ門葉の壯士旗下の烈夫八千よ餘ア死を極め
て籠城と鉄炮玉藥い多年の貯へふるとい藏う盈てその負を

知ひ大木大石い後の山よう心を任をそこれを取こも山深くくして盡る期ふ〜此外よあまさの端城あうて本城の戦急ふ〜んとき寄手の跡を切んとかまへたうされい秀吉押寄て一責責て見ゐひ〜かいやく〜此城力攻よふ〜ゆくし方便を廻らし緩くと攻へ〜されとも此勢を引揚んとき城よう打出追討をんと謀るふらんそれよい様ちをあまとそ小市郎秀長う先陣うたを秀吉ふうう殿〜谷ふの在家ふ放火し煙のまふまとうを引〜てゞ退たうけう

三木の端城志賀田又い志方ふも云ひ播州印南郡高砂の城神吉城ふ同郡ふう野口い加古郡高砂の東よ當る

重修直書太閤記五編卷之十二